

「今、私の晴雨計は！(54)」

「我が思い出の愛唱歌」 一

平山征夫

フランスの「国民的歌手」と言われたシャルル・アズナブールが10月初めに亡くなった。93歳の高齢だったが、9月半ばに来日し東京、大阪でコンサートを開いたばかりだったから、ちょっと驚いた。しかもカナダに旅行に行っていて帰りのモントリオールの空港の売店で、アズナブールが表紙の雑誌がずらっと並んでいて気が付いた。

たに人気が出てきたアズナブールやマシアス、アダモなどのレコードが日本でも発売され出したのだ。アズナブールがピアフの運転手をしていて見いだされたのは有名な話。以来50年以上が経ったが、アズナブールは折にふれ聴いてきた。大好きな「ラ・ボエーム」をはじめ「イザベル」「君は美しすぎた」「帰り来ぬ青春」「まるで病のように」コメディイアン」などの歌が次々に思い出される。大学で第二外国語にフランス語を選んだが、授業で習うよりシャンソンの方が覚えられた。今でもフランス語の歌詞が出てくる。もっともフランス語選択したのが、ドイツ語とどちらにしようかと迷っている私に、既にフ

ランス語を選択していた兄が「ドイツ語は馬に、フランス語は女性に聴かせる言葉だ」と言ったのがフランス語を選んだ理由だからたいしたことはない。もっともこの歳まで女性に「ジューテーム」を言ったことはない。知事退任して二年くらいした時、娘と妻の伴奏で私が主にシャンソンを歌うというディナーショウのようなイベントを行った。二八〇人くらいの前でディナーの後で歌ったのだ。知事の間忙しかったうえ娘たちが海外に居てちやんとした還暦のお祝いをしなかつたことの穴埋めというのがその趣旨だったが、付き合わされた大勢の方々には申し訳無かつたと思っている。もっともその時

はこれが歌手デビューとなって講演と同じくらい公演の依頼が来るかもくらいに思っていたのだが、結果は行きつけのスナックの開店30周年のパーティーで一度頼まれただけだった。この時、レパートリーに入れようとしたのがアズナブールの「ラ・ボエーム」だった。加藤登紀子など何人かの日本人歌手が日本語歌詞で歌い始めていたのでトライしたが、メロディに言葉を合わせるのが難しく、伴奏の娘からは許可が出なかつた。「パパ、お金を頂いて聞いてもらおうということがどういう事か考えて」と引導を渡された。その頃ヒットしていたマシアスの「恋心」「思い出のソレンツァ

ラ」や、アダモの「サントワマミ」
「雪が降る」などは愛唱歌となっ
たが、アズナブールの歌は「ラ・
マンマ」くらいで殆どは愛聴歌だ
った。一つの曲の中に人生のドラ
マが謳われているので、歌いこな
すのが難しいという詞と曲の組み
合わせも高度だったからだ。こう
して敢え無く歌手デビューは頓
挫した。シャンソンではピアフの
「愛の賛歌」、モンタンの「枯葉」
のほか「聞かせてよ愛の言葉」「ロ
マンヌ」「パリの空の下」「幸福を
売る男」「バダンバダン」「小雨降
る径」などの名曲と言われたもの
のほか、「行かないで」や「別れ」
など語りのなシャンソンも愛唱
してきた。

っと前、小学生の頃から好きな歌
を歌っていたが、当然それは童謡
や唱歌であった。童謡で好きでよ
く歌っていたのは「浜辺の歌」だ。
何ととってもメロディが美しい。
「朧月夜」「里の秋」「故郷」「早
春譜」など誰もが良く歌う歌の他
では「赤い靴」「砂山」がある。こ
の二曲は共にマイナーのメロデ
ィが心に沁みだ。特に「砂山」は
新潟市に来た時、地元の要望を受
けて白秋が作詞、中山晋平と山田
耕作が作曲したが、いずれも名曲
だ。ご当地童謡なら私の故郷・柏
崎の海岸が題材となった「浜千鳥」
も挙げなくてはならない。変わっ
たところで「稲村が崎」がある。
お袋の愛唱歌だった影響だが、
「七里が浜の磯伝い・・・」の詞

と曲は歌いやすく情景が浮かび
歌って気持ち良い。だが、この歌
が本当は「鎌倉」という題で八番
くらいまである鎌倉観光紹介の
歌の一番だとはずっと知らなか
った。二番を歌おうと思って歌詞
を調べて初めて知った。可笑しか
ったのは「シャボン玉」だ。ずつ
と「屋根まで飛んで壊れて消えた。
風風吹くな・・・」というのは台
風の歌かと思っていた。同じこと
を小澤昭一さんも何かに書いて
いた。後で野口雨情が幼くして子
供さんを無くした悲しみを込め
て作った歌だと知って早とちり
していた自分が恥ずかしかった。
その雨情の人生をその歌とともに
に童謡漫談として舞台に乗せた
芸人が近藤志げるさんだ。近藤さ

んは西條八十も舞台上上げてい
るが、娘のふたば子さんのエピソ
ードは今も残っている。ふたば子
さんは、父と同じ道を歩み、父の
思い出を本にしているが、中国で
迎えた終戦時のエピソードを近
藤さんは歌と共に語っていた。ふ
たば子さんが敗戦で自殺を考え
た時、聴こえてきたのが外で遊ぶ
子供たちの歌声だったが、それは
父八十が創った「お山の大将」だ
った。その歌声を聴いてふたば子
さんは生きようと思ったのだ。こ
の歌は自分がガキ大将だった遠
い昔を思い出させる。短調と長調
の切り替わりが明確な歌だ。近藤
さんとは知事時代、県の正月番組
に池辺晋一郎さんと共に出ても
らった。駄じゃれとクラシックの

逸話でぐんぐん話す池辺さんに一歩も引かず、最後近藤さんはアコデオンを弾いて「今日も暮れゆく…」と「異国の丘」を歌った。

白秋の「ゆりかごのうた」「私たちの花」「この道」「待ちぼうけ」や、八十の「かなりあ」「鞠と殿さま」などが童謡らしく比較的明るい歌なのに対し、雨情の詩の歌は「十五夜お月さん」「あの町この町」「こがね虫」「青い目の人形」「雨降りお月さん」などいずれもどこか寂しさが漂っている。多分に雨情の人生が投影しているのだろう。だから子供心にも惹かれた。童謡で競ったこの三人には大人になって愛唱した名曲もそれぞれある。白秋の「城ヶ島の雨」、八十の「お菓子と娘」、雨情の「波

浮の港」「船頭小唄」だ。特に船頭小唄は悲しい。「どうせ二人はこの世では花の咲かない枯れすすき…」、雨情はどんな気持ちでこれを作詞したのだろう。

一番歌詞の意味が解らなかつた歌が「故郷を離るる歌」だ。ドイツ民謡に日本語歌詞がぴったりしていないからだ。「そののさーゆー うりなーでし こおかきねーのちぐさ」と聞える歌詞は、幼かった私には「園の小百合 撫子 垣根の千草」とは聞えず、大きくなるまで奇妙な歌だった。「早春賦」を作詞した吉丸一昌の訳詞と言うが、元のドイツ語の歌詞は恋人を諦めて淋しく旅発つ前夜を歌った「最後の夜」という歌で、それを故郷との別れに替え

たものだ。早春賦は歌詞と曲がピツタリなのに「どうして？」と思うが、この歌詞にはもう一つ疑問が在る。それは「思えば涙、膝をひたす・・・」という歌詞の意味だ。涙が川のようになって膝まで浸すわけがないのにと思ったからだ。でも、故郷を出た私には気持ち がびつたりするのでよく歌った。

中学生になって加わった愛唱歌にロシア民謡がある。ダークダツクスやボニージャックスが盛んに紹介していたし、歌声喫茶ブームでも広がっていった。「カチューシャ」「トロイカ」の大ヒット曲以外でも「灯」「一週間」「小さなぐみの木」「カリンカ」「黒い瞳」「アムール川のさざ波」「リング

の花咲く頃」「鶴」などきりが無い。「灯」は中学校の学芸会で、同級生のK君と二人で二重唱をした。今でも下のパートを歌える。

“灯”と言えばちよつと忘れられない思い出がある。大学生の時、家庭教師で東中野のTさん宅（後日結婚式の仲人をして頂く）に毎週通っていた。四年生の秋、卒論だけが残っていた時の話だが、その卒論が遅れ気味で焦っていた。そんな折、東中野に行く途中、乗り換えの新宿駅構内ではつたり高校の同級生の妹さんに遇った。比較的家が近く知っていた。彼女は高校卒業後新宿のデパートに務めていた。お茶を飲みながら互いの近況報告をしているうち、私の卒論の原稿用紙への清書

を手伝って貰うことになった。そして、無事単位を取ることが出来たお礼にと「何か希望がありますか」と聴くと「一度歌声喫茶に行ってみたかったの」とのこと。それで新宿の歌声喫茶「灯」に行つた。小さな歌詞をまとめた灯の歌詞本は有名だった。それを見ながら二人も会場のお客と一緒にステージのリーダーについて歌つた。そのうちリーダーがマイクをもつて会場内を廻り、所々でお客にマイクを突き付けて歌わせた。そして私にもマイクが廻ってきた。何の歌だったか忘れたが思い切り最後の学生生活を惜しむように歌った。閉店になって帰ろうとするとさっきのリーダーが来て「内で働かないか!」と言った。

しかしもう就職先は決まっていた。今でもロシア民謡を歌うとその時のことを思い出す。最も愛唱したロシア民謡は「モスクワ郊外の夕べ」だ。ロシア人も大好きな美しい曲だし、モスクワの郊外の夕暮れ時の情景が歌われていて、それまでのロシア民謡にはない新しさが感じられる。この歌にまつわる感動的逸話がある。日本を代表する建築設計家である黒川紀章氏がまだ東大の学生の時、ソ連の主催でレーニングラードで開かれた「世界学生建築家会議」に参加した。その時黒川さんの英語通訳を務めたロシア人女学生と恋に落ちた。しかし、帰国後の黒川氏の手紙に彼女から返事はなかった。それから40

年以上が経過した時、NHK/BS「世界わが心の旅」という番組がその後を追った。諦めかけた時奇跡的に探し当てた彼女は、年月の経過を少し感じさせる程度で殆ど昔と同じ美しさのままアパートで黒川氏を迎えた。彼女の説明では同じ境遇の同僚が返事を書いたことで当局に目を付けられたため自粛せざるを得なかった由。部屋のピアノの上にはあの会議の時の二人の写真が飾られていた。そして彼女がピアノを弾きながら訊いた。「あの会議の合間に、あなたに教えてあげたこの歌を覚えている?」。それが「モスクワ郊外の夕べ」だった。人は皆思い出の歌を持っている。この歌でこんな素敵な思い出を持つ

ことになった黒川氏をとでも羨ましく思った。この番組は、これまで見たTV番組の中でも立原撰子のテーマ音楽ともども最も好きな番組だ。時の経過が、人と人の巡り合いが、人々の深い心の襞に思い出という何にも代えがたい宝を刻んでくれるからだ。愛唱歌も同じように思い出を刻んでくれる。

(平成30年12月25日)

